

日付:2016年7月24日／聖書:サムエル記下21:1～14

説教:「人間の悲嘆を心に刻む」

1985年、戦後40年の節目に語られたドイツの大統領ヴァイツゼッカーの挨拶文がある。「われわれは今日、あの戦いと暴力支配との中でたおれた全ての人々を哀しみのうちに思い浮かべております。ことにドイツの強制収容所で命を奪われた六百万のユダヤ人を思い浮かべます。…

虐殺された人々、殺された同性愛者の人々、殺害された精神病患者、宗教もしくは、政治上の信念ゆえに死なねばならなかった人々を思い浮かべます。…

計り知れないほどの死者のかたわらに、人間の悲嘆の山並みがつづいております。死者への悲嘆、傷つき、障害を負った悲嘆、…故郷を追われ、暴行・略奪され、強制労働につかされ、不正と拷問、飢えと貧窮に悩まされた悲嘆、捕われ殺されはしないかという不安による悲嘆、…こうした悲嘆の山並みです。

今日われわれは、こうした人間の悲嘆を心に刻み、悲傷の念と共に思い浮かべているのであります。人々が負わされた重荷のうち、最大の部分を担ったのは多分、各民族の女性たちだったでしょう。女性たちの苦難、忍耐、そして人知れぬ力を、この世界は、余りにもあっさりと忘れてしまうものです。彼女たちは不安におびえながら働き、人間の生命を支え護ってきました。戦場でたおれた父や息子、夫、兄弟、友人たちを悼んできました。…戦いが終わるころから、確かたる未来の見通しもないまま、先頭に立って石を一つ一つ積み上げていき出したのは女性たちでした。ベルリンを始め全国の『がれきの女』のことです。…」

この大統領の挨拶には、ドイツの起こした戦争に対する悲嘆の一つ、一つに向き合う事の大切さ、そして戦後の復興にどこの国でもそうだが、女性たちによる苦難と忍耐の賜物によるところが大であること。

今朝の物語に出て来た女性、母リツパは、放置された遺体に粗布をかぶせて、鳥や獣が来て遺体を荒らさないように守った。昼間は空の鳥から遺体を守り、夜は忍び寄る獣から遺体を守り続けた。約6ヶ月の間、リツパは息子たちの遺体を守ったのだ。その悲しみ、嘆きは、どれ程のものだったか。その行為は、まさに悲嘆を心に刻み続けることになったはず。女性の多くがそのように悲嘆を心に刻むものであろう。

聖書は、そのリツパの行為によって、飢饉がやんだことを記すが…。沖縄もまた、悲嘆を心に刻み込んできた島だ。その心をないがしろにする暴力が、国家権力によって今、この島をむしばんでいる。この国は、飢饉から守られるのだろうか？ この国の行く末を案じてならない。(神谷)